

# 通信小海

## ああ、弟よ

牧師 水草修治



ああ弟よ、君を泣く、  
君死に給うことなけれ  
末に生まれし君なれば  
親の情けはまさりしも  
親は刃を握らせて  
人を殺せとおしへしや  
人を殺して死ねよとて  
二十四までを育てしや・・・(後略)

与謝野晶子は、弟が日露戦争の旅順口包囲戦という絶望的な戦闘に徴兵されたとき、たましいの慟哭を右の歌に託した。なんと勇気のあつた歌人だろうと眼を見張る。むろん戦時下に不謹慎だという批判者はいたが、夫や

「今月の御言葉」  
「蛇のように賢く、  
鳩のように素直でありなさい。」  
イエスのことば

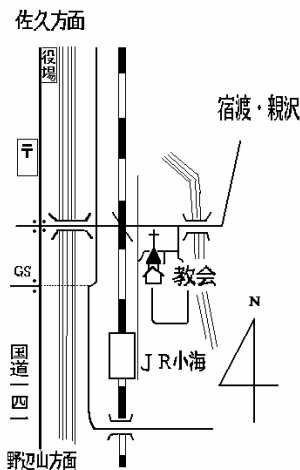
恋人・息子・兄弟を戦地に奪い去られた人々は共感した。今でもこの一節を朗読してみれば、人の子の親ならば同じく胸に迫るものを感じずにはいられない。

晶子が勇気の人だったことはもちろんいうまでもない。しかし、日露戦争当時の日本には、まだこういう歌を発表できる空気があった。内村鑑三たちも、それぞれに非戦の訴えをしている。大正期にはなお自由な空気は旺盛だったという。

しかし、やがて平和を訴える言論はだんだんと聞こえなくなっていく。めばしい理由のひとつは、治安維持法である。治安維持法は一九二三年(大正十二年)、関東大震災を機に緊急制定されたが、五年後に罰則が強化され、太平洋戦争目前の一九四一年には疑わしきは罰する「予防拘禁」までも定められた。治安維持法のため奪われた人命は国内で千六百八十二人に及び、逮捕者は数十万人に

日本同盟基督教団小海キリスト教会 牧師 水草修治  
会堂・牧師館 南佐久郡小海町大字小海四三五五 二七  
千三八四一一 二二 二六七九二四七七六  
カンパ宛先〒振替005300 61683

## 見晴台の教会へどうぞ



## 集会あんない

**日曜日** サンデースクール 午前八時四五分  
朝礼拝 午前十時から十一時半  
夕礼拝 午後七時半から八時半  
**水曜日** 祈り会 午前十時半と午後七時半  
\*海尻・川上・大泉で毎月家庭集会あり。  
\*個人的な聖書勉強や個人的なご相談にも乗ります。

上るそつである。

もう一つの理由は教育である。もともと教育勅語は、「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ、天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ(戦争になつたら天皇陛下に命をささげよ)」と教えていたが、特に昭和八年、五・一五事件で世論が、特に右傾化すると、翌年、国定教科書の全面改訂が実施され、一年生は入学するなり「ススメ ススメ ハイタイススメ」と教えられるようになった。その四年後には日中戦争、そして、日米開戦へと続く。

もう一つの大きな理由は、国民意識を戦争にかりたてた新聞である。新聞が「大本营発表」の場となつたので、国民は正しい情報を得ることも考えることもできず、旅ネズミのように断崖絶壁に向かつて集団で暴走した。あの与謝野晶子でさえ太平洋戦争時には、出征した息子のため、「水軍の大尉となりて我が四郎 み軍(いくさ)にゆくたけく戦へ」と軍国の母らしく勇ましい歌を詠んでいる。

今、「平成の治安維持法」と呼ばれる組織犯罪防止法が議案とされ、政府は国会に出したり引つ込めたりして様子見をして

いる。また「愛国心」を焦点とする教育基本法の国会審議とびつたりのタイミングで、マスコミは高校の未履修科目問題で騒ぎ始め、ある軍事評論家はテレビで今にも核ミサイルが飛来するかのようには話しているそつだ。たしかにどれも重要課題だが、こうした報道の結果、「自治体や学校に教育は任せておけぬ。国がもっと強力に教育を管理せよ。」とか「我が国にも核兵器を。先制攻撃も視野に入れよ。」という方向に世論が誘導されつつあるように見える。頭を冷やして、ほんとうのことを見極めたいものである。

「蛇のように賢く、  
鳩のように素直でありなさい。」

イエスのことば



## 海尻井出博彦さんち

### で家庭集会

夜七時半から九時、聖書を読む会をします。こ一報くださって日を確かめて、お越しください。 **96 2534**

## 南相木でも家庭集会

\* 十一月九日(木曜)午後七時半

南相木日向の中島悦子さん宅です。

\* 家庭集会には牧師夫婦がでかけ、聖書を読んだり賛美歌を歌つたりします。どなたでも気軽にどうぞ。

寒くなつてきました



## お米・毛布を感謝!

信州から野宿者支援

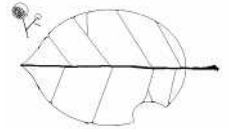
呼びかけに答えて、佐久穂町から一件、小海町から三件、北相木村から一件、お米が寄付されました。合計四百キロあまりです。毛布もいただきました。感謝します。天からの祝福がありますように。

山谷農場事務局(藤田 寛)小海町芦谷  
ヒルサイドコーポ一 二号室毎週金曜・土曜は  
あります。電話090・1436・6334

〒370-0422・7866・2088

メール nyoro@beige.ocn.ne.jp

# 小事と大事



イエスのたとえばなしに「タラントのたとえ」がある。ある主人が三人のしもべに、それぞれ一タラント、二タラント、五タラント預けて旅に出る。五タラント、二タラント預かったしもべは、それぞれ工夫をして五タラント、二タラント儲けた。ところが、一タラント預かったしもべは、地を掘って、その主人の金を隠しておいた。

さて、よほどたつてから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をする。すると、五タラント儲けた者と二タラント儲けた者に主人は言った。「よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさん物を任せよう。主人の喜びをもとに喜んでくれ。」

ところが、一タラントのしもべは主人に言った。「ご主人さま。あなたは、時かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひ

どい方だとわかっていました。私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。」

主人は彼に答えて言った。「悪いなまけ者のしもべだ。私が時かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。・・・そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。・・・役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出しなさい。そこで泣いて歯ぎしりするのです。」

この譬えの主人とは主イエスのことであり、しもべとは我々のことである。主イエスは私たちそれぞれに、いのちと能力とチャンスを与えてこの世に生かしててください。そして、この人生の終わりのとき、主イエスはあなたを迎えに来られる。

主は私たちを迎えると、それぞれにあの主人がしもべにしたように清算をなさる。主が人間に与えた命令は、「心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛し、隣人を自分と同じように愛せよ」ということである。したがって、もし、あなたが主をあげ感謝

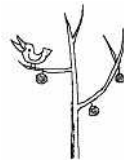
し、隣人を愛するために、自分の能力やチャンスや時間や富を活用したとすれば、それは、主の前に積んだ宝とみなしていただける。主はあなたに「良い忠実なしもべよ。あなたは小事に忠実だったから。わたしはあなたに大事を任せよう。」とおっしゃって、天国で大いなる永遠の喜びと奉仕を与えてくださる。それは文字通り永遠の祝福である。

しかし、もし、あなたが主を愛し隣人を自分自身のように愛するという目的を忘れ、ひたすら自分の欲求のために、能力や時間や富を用い、たくわえあるいは浪費したとすれば、あなたはあの一タラントのしもべである。死後、永遠の暗闇のなかで泣いて歯ぎしりすることになってしまう。

小事とはこの世のかぎりある人生。大事とは次の世の永遠の人生である。しかし、この小事であるこの世の人生の生き方が、次の世の大事の人生を永遠の喜びとするか、あるいは永遠の後悔とするかを分けるのである。だから、今日一日の人生をおろそかにせず、いのちをくださった主に感謝し、隣人を愛するために生きていきたい。

# この世で

## 最上の仕事



この世で最上の仕事は何であろうか。

美しい心で年をとり、

働きたくても休みをとり、

失望しそうなときにも希望をもち、

素直に平安に自分の十字架を担う。

若者が元気いっぱい、

はつらつとかつぱするのをみても、

ねたみはしない。

人のために働くよりも、

素直に人の世話になり、

弱って、もはや人のために役立てなくても、

親切で柔和でありたい。

老いの重荷は神の賜物、

古びた心に自分で最後の磨きをかける、

まことの故郷に帰るために。

自分とこの世をつなぐ鎖を少しずつ外して

ゆくのち、大切な仕事のひとつ。

そして何もできなくなれば、

それを謙虚に受け入れよう。

神は最後にもっともよい仕事を残してください。

それは祈りだ。

手はもはや何もできなくとも、手を合わせることはできる。

愛するすべての人に、神の恵みを願うために。

すべてを終えてしまったら、

臨終の床で神の声を聞くだらう。

「来たれ、わが友よ、われ汝を見捨てじ」と。

聖路加病院の日野原医師が紹介していた詩である。若い日、私たちはなにか自分ができることを誇りとして生きていがちなものである。けれども、実はその「自分ができなこと」も神が、人生のある時期に託してくださっている賜物にすぎない。

賜物をたくされている時期には、感謝して、神の喜ばれるように活用し、その託された能力によって良い果実を得たならば、神に感謝し、隣人とともにその果実を分かち合うがよい。

しかし、やがて必ず、その賜物としての

若さや健康が取り上げられる日が訪れる。今

まで当たり前のように記憶できた人の名前が、覚えていられない。かつて当然のように

噛むことができたせんべいが食べられない。

かつてなら三十分で縫い上げたものが、一時間かかっても仕上がらない。さっさと登ることのできた坂なのに、息が上がってしまう。

そのとき、最後に残された最も尊い仕事は祈り。若く忙しい時にはなにかと口実をもつけておろそかにしがちがった祈りが、人生最高の仕事になる。

高の仕事になる。

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあげさせたまえ

御国を来たらせたまえ

みこころの天になるごとく地にもなさせたまえ

我らの日用の糧をきょうも与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく

我らの罪をも赦したまえ

我らをこころみにあわせず

悪より救いだしたまえ

国と力と栄えとはとこしえに汝のものなればなり